

2024 年度 南山大学人文学部日本文化学科
卒業論文

高知方言における四つ仮名の区別に関する研究
—ガ行鼻濁音の研究を参考に—

安藤 純音

指導教員

平子 達也 准教授

要　旨

本研究は、高知方言における四つ仮名(ジ・ヂ・ズ・ヅ)の区別がどのような条件下で保存され、また消失しているかを調査・考察することを目的とする。歴史的には、日本語中央方言では四つ仮名の音韻的区別が明確であったが、中世以降その区別が失われ、現代日本語の多くの方言で完全に消滅している。しかし、高知方言ではその区別が一部で保たれている可能性が指摘されている。先行研究では、四つ仮名の区別に関する調査が行われてきたものの、地域差や世代間の変化に焦点を当てるにとどまり、どのような環境で区別が保存されやすいかについての検討は十分に行われていなかった。本研究では、先行研究で用いられた「地域差・世代差」の視点に加え、東京方言のガ行鼻濁音に関する日比谷(2002)の研究を参考に、言語内要因(先行音環境、連濁の有無、語種)を用いた調査を行った。調査は、高知県出身の若年層2名と老年層1名を対象に、オンラインでの単語聞き取り調査の形式で実施された。結果として、「ジ」と「ヂ」の区別は全ての話者において消失していた一方、「ズ」と「ヅ」については、老年層に限り、和語かつ連濁によって生成された音節で区別が保持される傾向が確認された。

目次

1.はじめに	1
2.対象となる方言について.....	1
3.先行研究のまとめ	2
3.1 四つ仮名の歴史に関する概要	2
3.2 高知方言における四つ仮名の区別とその衰退に関して.....	3
3.3 音声の変化・変異に関する言語内外の要因について	3
3.4 先行研究のまとめと本研究の方針	4
4.調査の概要	5
5.調査結果と考察	6
5.1 調査結果.....	6
5.1.1 「ジ」「ヂ」の調査結果	6
5.1.2 「ズ」「ヅ」の調査結果と分析	6
5.2 考察.....	7
5.2.1 「ジ」「ヂ」の区別が完全になくなっていることについて	7
5.2.2 「ズ」「ヅ」の区別が残されている環境.....	7
6.おわりに.....	9
参考文献.....	10

1. はじめに

歴史的仮名遣いで「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」と書かれる音節は、少なくとも鎌倉時代までの日本語中央方言では、それぞれ音韻的に区別されていて、鎌倉時代には、「ジ」は[ʒi]、「ヂ」は[dʒi]、「ズ」は[zu]、「ヅ」は[d(z)u]と発音されていたと考えられる。つまり、「ジ」「ズ」の子音は摩擦音で、「ヂ」「ヅ」の子音は破裂音あるいは破擦音であったと考えられる。しかし、室町時代になると、「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」の区別が曖昧になり、現代日本語共通語では、「ヂ」は[dʒi]の音への変化が一般化し「ジ」と混同されるようになった。「ヅ」も鎌倉時代までは[du]の音であったが、室町時代に[dzu]への変化が一般化し、「ズ」と混同されるようになった。それは、共通語以外でも同様で、現代日本語諸方言のほとんどで、元々歴史的仮名遣いで「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」と書かれていたものはそれぞれ区別が失われている。しかしながら、高知県方言においては、「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」の合流が進んでいるものの、少なくとも数十年前の研究によれば、その区別が残されていたという(大野 1977 : 306, 外山 1972 : 103, 小松 1981 : 127)。

従来の「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」の四つ仮名の発音の区別に関する研究では、区別を残す地域の話者を対象に、四つ仮名を含む単語をいくつか挙げ、聞き取り調査をするというものが行われてきた。しかしながら、これらの調査は、区別に地域差があるのか、年齢層で区別がどう変わるものかと言うものに焦点を当てたものが多く、そもそもどのような場合に区別が保たれやすいのか、あるいは、どのような場合に摩擦音と破擦音のどちらが現れやすいのかという点については必ずしも明らかにされていない。そこで、本研究では、どのような場合に四つ仮名の発音上の区別が保たれているのか、そしてどのような場合に摩擦音あるいは破擦音で現れるのかを明らかにすることを目的に、高知方言の母語話者に聞き取り調査を行った。その際、東京方言におけるガ行鼻濁音の分布を調査した日比谷(2002)の研究を参考に、そこで使用された言語内要因のうち、先行音環境、連濁の有無、語種の三つを考慮した。調査の結果、和語であり、かつ、当該の音節が連濁によって「ツ」が濁音化した音節である場合に、[zu]と区別される[dzu]の音が現れやすいことが分かった。

本論の構成は以下の通りである。まず、2節にて対象となる方言についてまとめる。続く3節では、先行研究について述べ、4節では調査の概要をまとめる。5節は調査結果と考察、6節はまとめである。

2. 対象となる方言について

高知県で話されることばは、図1のように、県中央部から東部にかけての「土佐方言」(A 東言葉)と、県西部、幡多地域の「幡多方言」(B 西言葉)という、大きく2つの方言に区分される。A(土佐方言、東言葉)とB(幡多方言、西言葉)の分割の第1の指標となるのはアクセントであり、土佐方言では京阪式アクセント、幡多方言では東京式アクセントに準ずるアクセントが認められる。一般に、土佐の人は「幡多の人は声をひく」と言い、土佐方言にないアクセントやイントネーションを示唆する。このほか、両方言では、動詞のアスペクトや命令表現などにも、明らかな相違点が指摘できる。愛媛県や徳島県と境を接して

いるので、歴史的・文化的にも両県の影響は少なからずある。(上野 2020 : 2-3)

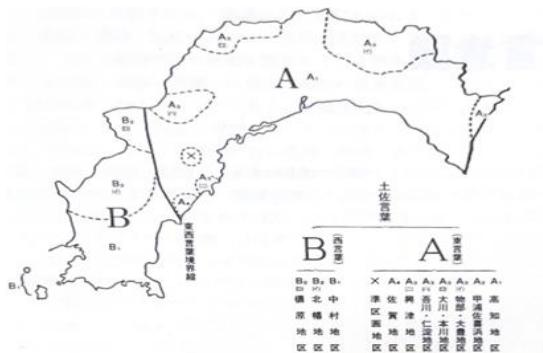


図1「土佐言葉区画図」『高知県方言辞典』

3. 先行研究のまとめ

3.1 四つ仮名の歴史に関する概要

「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」の四つ仮名が表す音は、江戸時代に入り発音上の区別が失われるまで都では音韻的に区別されていた。しかし、もともと破擦音であった「ヂ」[dʒi]と「ヅ」[dzu]の子音が摩擦音に変化し、もともと摩擦音であった「ジ」[ʒi]「ズ」[zu]の子音と同じになり、中世後期以降に「ヂ」と「ジ」、「ヅ」と「ズ」とがそれぞれ混同されるようになった(外山(1972:175-268), 大野(1977:306), 森田(1977:255-280), 奥村(1972:102), 小松(1981:127-128))。この混同について、外山(1972:198)は『イソボ物語』では、「nezumi (鼠)にまじって, nezzumi の形が見えるし,『平家物語』においても, mizu (水), miyazucai(宮仕) (これらは zzu が期待されるもの)」の表記がみられる。日本語教科書として規範意識の強いはずの『イソボ物語』『平家物語』の資料¹において、表記に混乱がみられるることは、中世後期以降の四つ仮名混乱の状態を十分に表しているといえる。規範性という点において、前出の資料以上のものが要求されるはずである『日葡辞書』においても混乱がみられる。」と四つ仮名の混乱について記述している。また、外山(1972:198)は、『日葡辞書』(1603 天草学林刊, 「補遺」は翌年刊)の中の混乱の例として「Iidanda(地だんだ), Iocuacu(濁惡)」などを挙げている。これらは、同辞書の I の部(j, つまり, ジが入るべき部)に載せられたが、歴史的仮名遣いでは「ヂ」と綴られるものであり、その点から言えば G の部に入れられるべき語であった。²(引用元の漢数字を算用数字に変更している。)森田(1977:266-267)は、混乱の例として以下のようないものを挙げている。(矢印左側が本来期待されるもの)

- Fonji(本寺)→Fongi
- giban(地盤)→jiban
- midzu(水)→mizu
- mairazu(参らず)→mairadzu

¹ 『イソボ物語』や『平家物語』などのキリストン資料とよばれる日本宣教のために作られた資料の一部は、日本語教材として使われた。

² 今日標準的には区別していないジ・ヂ・ズ・ヅを、ローマ字資料では ji,gi,zu,zzu,(dzu)とかき分けた。gi は、ポルトガル語ではすでに ji と同音になっていたが、日本語のヂにあててジ(ji)と区別して用いた。(森田 1977:266)

四つ仮名は混乱を経てほとんどの地域において区別されなくなったものの方言的にはいまだ区別する地方がある。外山(1972:103)は四つ仮名の区別を残す地域の一つとして土佐地方を挙げている。しかしながら、小松(1981:127)は、この点について「現在ではすでに合流がかなり進んでいるらしい」として、すでに土佐地方においても四つ仮名の区別が残されていない可能性を示唆している。

3.2 高知方言における四つ仮名の区別とその衰退に関して

高知方言は、四つ仮名(ジ・ヂ・ズ・ヅ)の発音の区別が、日本国内で最後まで残存している方言として注目されてきたが、現在その区別が保たれているのは老年層に限られ、次第に失われつつある(上野 2020 : 2-3)。

上野(2020 : 2-3)によれば、高知方言のザ行「ジ」の子音は、有声歯茎硬口蓋破擦音ないし摩擦音で、音節全体としては[dʒi]あるいは[ʒi]である。四つ仮名の区別がある場合は摩擦音になる。ズは[ð][dz][z]があり、個人差が大きい。一方、ダ行子音「ヂ」「ヅ」は、四つ仮名の区別がある場合にはヂが[dʒi]、ヅが[du]ないし[dzu]である。

また、上野(2020)は、通常、「ジ」「ズ」を用いて表される「ねぢや」(ネジ屋)・「いちぢく」(無花果)・「クヂラナイフ」(鯨ナイフ)・「ヂーゼル」(ディーゼル)・「アートヴィレッヂ」(アートヴィレッジ)・「はしづめ接骨院」(橋詰接骨院)などの広告や看板において、ヂやヅを前面に押し出した表記が使われていることを指摘する。これらは、漢字を用いず仮名で表記することにより、発音の違いをきわだたせようとする強い区別の意識の投影であり、通常であれば「ジ」「ズ」を用いて表されるとしている。

土居重俊・浜田数義(1985)は「実際の発音で特徴的なのは[tu][du]で、ラジオから流れる地元道路交通情報センターのアナウンスでは[ko:tū:] (交通)[tuduku] (続く)の発音がはっきりと確かめられる。また、現在では劣勢に傾いているものの、入り渡り鼻音(前鼻音)が[mindžu] (水), [kaŋgami] (鏡)のように, /d/g/の前に現れる。「江戸」がエンド, 「鍵」がカンギに近く聞こえる。この現象は語中・語末において顕著であるが, 時に語頭においても「ごみ」がンゴミ, 「どろ」がンドロのように聞こえることもある」と述べている。高知県の四つ仮名はdに鼻音を伴うためヂとヅ(摩擦性が弱く、時には[du]になる)は鼻音を伴うが、ジとズは摩擦音であり、鼻音を伴わない。それに対し、九州の四つ仮名は破擦音と摩擦音で区別され、鼻音は伴わない(久野眞 2005)。このように、/d/の前に入り渡り鼻音(前鼻音)を伴うことがあり、その存在が四つ仮名の対立を日本国内で最後まで残存させる要因となっていたと考えられる。しかし、今ではほとんどその区別は失われている。

3.3 音声の変化・変異に関する言語内外の要因に関して

3.2 節で述べたように、高知方言における四つ仮名の区別はなくなりつつある。しかし、その区別がどのような場合になくなりやすく、どのような場合に保たれやすいのかということについての研究はない。ここでは、このような発音の変化及び変異における言語内外の要因について検討した日比谷(2002)の研究を参考に、どのような要因が発音の変化や変異に関わるかを検討する。

日比谷(2002)では、日本語ガ行鼻濁音衰退をめぐる変異を例として、言語変異の地理的差異を検討している。日比谷(2002)は調査の中でガ行鼻濁音が破裂音化する際の要因として非言語情報が関与している**言語外(社会的)要因**と、言語情報が関与している**言語内要因**の二つを挙げている。それぞれの中身は以下のとおりである。

言語外(社会的)要因	言語内要因
年齢	先行音環境
性別	連濁の有無
地勢	アクセント核の有無
発話スタイル	語種
	語の内部境界の種類
	内容語と機能語
	後続子音

網掛けの部分は筆者が今回の調査で使用した要因である。網掛け部分について、日比谷の研究でどのような場合にガ行鼻濁音が現れやすい(=鼻音化しやすい)かを以下にまとめる。(＜鼻音化しやすい)

【言語外(社会的)要因】

話者の年齢:若年層＜中年層＜老年層

【言語内要因】

先行音環境: $u < i < oea <$ 撥音

連濁の有無:非連濁によるガ行音＜連濁によるガ行音

語種:外来語＜漢語＜和語

3.4 先行研究のまとめと本研究の方針

ここまで述べてきたように、四つ仮名の区別は失われつつある。四つ仮名の発音の区別に関する研究については、区別を残す地域の話者を対象に、四つ仮名を含む単語をいくつか挙げ、聞き取り調査をするというものが行われてきた。しかしながら、これらの調査は、区別に地域差があるのか、年齢層で区別がどう変わるのが言うものに焦点を当てたものが多く、そもそもどのような場合に、摩擦音「ジ」「ズ」と破擦音「ヂ」「ヅ」のどちらが現れやすいのかという点については必ずしも明らかにされていない。

一方、発音の変化及び変異における言語内外の要因について検討した日比谷(2002)の研究によれば、東京方言におけるガ行鼻濁音は言語外(社会的)要因としては、話者の年齢が若年層よりも中年層、中年層よりも老年層の場合にガ行鼻濁音が現れやすいことが明らかになっている。また、

言語内要因としては、先行音環境が u の場合よりも i の場合、i の場合よりも oea の場合、 oea の場合よりも撥音の場合、連濁がない場合よりもある場合にガ行鼻濁音が現れやすいという。さらに、語種が、外来語の場合よりも漢語の場合、漢語の場合よりも和語の場合に保存されやすい。

そこで、本研究では、高知方言における「ジ」「ズ」と「ヂ」「ヅ」の区別がどのような場合に保存されやすいのかを明らかにすることを目的に、高知方言の母語話者に日比谷(2002)で使用された要因を使用した調査票を作成し、単語の聞き取り調査を行った。

4. 調査の概要

高知県出身の若年層 2 名、老年層 1 名の計 3 名にご協力いただき、オンラインにて単語の聞き取り調査を行った。

調査方法としては、先行研究(日比谷 2002)にて用いられた言語内要因の一部である先行音環境(a,i,u,e,o、撥音、語頭)、連濁の有無(連濁により「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」音が生じたと考えられるものを連濁ありの調査語として採用している。)、語種(和語、漢語、外来語)を考慮して決定した調査語のリスト(「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」のいずれかを含むもの)を協力者の方に方言で発音していただき、こちらが聞き取り、分析を行うという形をとった。

使用した調査語は次のとおりである。表の右側の列は言語内要因が何であるかを示した列となっている。/の右側あるいは左側が空欄となっているところは、適当な語が見つからず調査を行わなかったものである。

<ズ><ヅ>	先行音	連濁	語種
鯖寿司/手綱	a	○	和語
数/小豆	a	×	和語
/左図	a	×	漢語
仮住まい/荷造り	i	○	和語
傷/水	i	×	和語
/地図	i	×	漢語
鮎寿司/巣作り	u	○	和語
硯/鼓	u	×	和語
骨髓/構図	u	×	漢語
入れ墨/餌付け	e	○	和語
鼠/珍しい	e	×	和語
/絵図	e	×	漢語
横好き/大詰め	o	○	和語
百舌鳥（もず）/鬼灯	o	×	和語
/海路図	o	×	漢語
本好き/瓶づくり	撥音	○	和語
/心電図	撥音	×	漢語
(骨の) 髓/図工	語頭	×	漢語

<ジ><ヂ>	先行音	連濁	語種
粗塩/鼻血	a	○	和語
馴染む/薄味	a	×	和語
マジックペン/スタヂアム	a	×	外来語
家事/魔女	a	×	漢語
二枚舌/散り散り	i	○	和語
しじみ/いちぢく	i	×	和語
掲示/明治	i	×	漢語
薄塩/	u	○	和語
すじこ/鯨	u	×	和語
クルージング/ビルディング	u	×	外来語
仏事/悪女	u	×	漢語
目印/手近	e	○	和語
/けぢめ	e	×	和語
ネジ/メヂアン	e	×	外来語
世辞/	e	×	漢語
猫舌/目力	o	○	和語
ほじる/叔父	o	×	和語
文字/素地	o	×	漢語
レンジ/ラヂウム	撥音	×	外来語
漢字/	撥音	×	漢語
バッジ/ドッヂボール	促音	×	外来語
ジプシー/デレンマ	語頭	×	外来語
地面/痔	語頭	×	漢語

5. 調査結果と考察

5.1 調査結果

5.1.1 「ジ」「ヂ」の調査結果

調査票に記載した調査語を3名の話者の方に発音していただいたところ、歴史的仮名遣いの「ジ」と「ヂ」に対応するような区別がなかった。ともに、[ʒi]と発音された。また、土居・浜田の挙げたような前鼻音の存在は確認されなかった。

5.1.2 「ズ」「ヅ」の調査結果と分析

「ズ」と「ヅ」の区別に関しては、若年層と老年層で異なる結果が得られた。若年層においては、ともに[zu]と発音された。一方で、老年層への聞き取り調査では、区別が一部残っていると考えられるものもあった。「ヅ」[dzu]音に該当すると考えられる単語は次の表のとおりである。

	先行音	連濁	語種
手綱	a	○	和語
荷造り	i	○	和語
巣作り	u	○	和語
鼓	u	×	和語
瓶づくり	撥音	○	和語

以上より、「ジ」「ヂ」については老年層に至るまでその区別が失われている一方で、「ズ」「ヅ」については、限られた環境ではあるが老年層においてその区別が保たれていることがわかった。

5.2 考察

5.2.1 「ジ」「ヂ」の区別が完全になくなっていることについて

「ズ」「ヅ」の区別に先駆けて、「ジ」[ʒi](摩擦音)と「ヂ」[dʒi](破擦音)の発音の区別があらゆる環境で失われた理由については、以下の吉田(1982)の見解が参考になる。吉田は、「土佐の四つ仮名の発音は、「ヂ」「ヅ」の子音の前に入りわたりの鼻音が入る音声現象のために、結果としてその区別が保たれやすいという面もあり、また、「ヅ」の発音に[dzu],[dʒu],[du]の音が見られたのに対応して、「ツ」の発音には[tsu],[tʃu],[tu]などの音が存する。これに対して「チ」は[tʃi]ないし[tʃi]で[ti]の音価をとどめていない。このことは、今後、「ヅ」よりも先に「ヂ」の音が衰退するであろうことを予測させる。」としている。吉田(1982)の予測のとおり、「ヅ」よりも先に「ヂ」の音が衰退した結果、「ジ」[ʒi](摩擦音)と「ヂ」[dʒi](破擦音)の発音の区別がいち早く失われたと考えられる。

5.2.2 「ズ」「ヅ」の区別が残されている環境

「ズ」「ヅ」の区別が残されている環境、より具体的に言えば歴史的仮名遣いで「ヅ」に対応する音節の頭の子音が破裂性(d要素)の強い破擦音で現れ、摩擦音zや破裂性の弱い破擦音と区別される場合、その5語いずれもが和語であり、またそのうち4語は「ヅ」にあたる音節が連濁によって「ツ」から交替して生じた語であった。以上のことから、和語で、かつ連濁によって当該の音節が生じた場合には、「ズ」「ヅ」の区別が保持される傾向があると考えられる。(＜「ズ」「ヅ」の区別が保持されやすい)

語種：漢語=外来語<和語

連濁の有無：連濁無<連濁有

日比谷(2002)は、ガ行音について、連濁によるガ行音が非連濁によるガ行音よりも破裂音化

しやすいことを示している。言い換えると、日比谷(2002)は連濁により「新しい」音である[g]が発生することを述べている。

このことについて尾崎(2015:162)は、中東靖恵(1999・2000)の指摘した「(1)ガ行鼻音かガ行非鼻音かは意味の弁別にほとんど役に立たない。³(2)正書法においてガ行鼻音とガ行非鼻音を書き分ける手段がない。⁴」という点に加え、「(3)連濁によるガ行音は[g]で発音するのが自然かつ体系的であることの影響。」と「(4)語頭に有声子音を持つ語が複合語の後部要素となったときの音声の保持。」という点をガ行鼻音衰退の理由として挙げている。

尾崎(2015)の指摘のうち、(3)については、「「狸」の語頭の子音は無聲音の[t]だが、直前に「大(おお)」が付いて複合語「大狸」となると連濁が生じ、子音は有聲音の[d]となる。また、「星」の語頭の子音は無聲音の[h]だが(歴史時代以前の日本語では[p]だと考えられている)，直前に「流れ」が付いて複合語「流れ星」となると連濁が生じ、子音は有聲音の[b]となる。これと並行的に考えると、語頭の無聲音の[k]は、複合語で連濁が生じると有聲音の[g]となるのが自然である。たとえば「事(こと)」の語頭の子音は無聲音の[k]だが、「大(おお)」が付いて複合語「大事」となると、[k]に対応した[g]で発音するのが自然であり体系的にも整う。つまり、無聲子音を語頭に持つ単純語を、複合語の後部要素としつつ連濁させる場合は、同じ調音点の有聲音で対応させる(有聲音に変える)というルールが働くため、カ行音がかかわる複合語では、[ŋ]よりも[g]の方が自然だということになる。連濁による非語頭のガ行音は多数あり、それらの発音で[g]が優勢になると、「鏡」のような連濁によらない非語頭のガ行音も統一的に[g]で発音しようという意識が働くに違いない。ガ行鼻音の衰退にはこうした「連濁」という事情も関与している可能性がおおいに考えられる。」と説明を付している。

そして、(4)については「「大学」の語頭の子音は有聲音の[d]だが、直前に「地方」が付いて複合語「地方大学」となった場合も、子音は[d]のままである。また、「バラ」の語頭の子音は有聲音の[b]だが、直前に「白」が付いて複合語「白バラ」となった場合も、子音は[b]のままである。これと並行的に考えると、語頭の有聲音の[g]は、複合語の後部要素となった場合も[g]のままであるのが自然である。たとえば「学校」の語頭の子音は有聲音の[g]だが、「小(しょう)」が付いて複合語「小学校」となった場合も[g]で発音するのが自然であり体系的にも整う。「小学校」のガの子音を[ŋ]で発音するのはむしろ不自然かつ非体系的である。

³ 調音点が同じ破裂音[d]と鼻音[n]の違いは、たとえば「派手」と「羽」のミニマルペアのように意味の違いを生む。また、破裂音[b]と鼻音[m]の違いも、「カバ」と「鎌」のミニマルペアのように意味の違いを生む。ところが破裂音[g]と鼻音[ŋ]の違いはどうかというと、[kage]と発音しても[kane]と発音しても「影」の意味であり、意味の違いを生まないということである。つまり、両音を弁別する必要性は低いのである。(尾崎(2015:161-162))

⁴ もしガ行鼻音とガ行非鼻音の違いを明示的に示す必要があり、かつそれをカタカナで表記する場合は、[ga]は「ガ」、[ŋa]は「ガ°」のように書き分ける習慣がある。しかし、誰もが日常的に使うような正書法としては表記の区別がない。もし正書法で[ga]と[ŋa]を書き分けていたならば、これらの発音の違いを常に意識しなければならないわけであるから、両者の発音の区別は保たれ、従って[ŋ]は衰退することがなかった可能性がおおいに考えられる。(尾崎 2015:162)

こうした、複合語の後部要素となったときの発音の一貫性ということも、ガ行鼻音の衰退に関与している可能性がおおいに考えられる。」と説明を付している。

この尾崎が指摘した(3), (4)の理由について本研究に当てはめて考えてみると、まず(3)については、「綱」の語頭の子音は、無声子音[t]だが、直前に「手(た)」が付いて複合語「手綱」になると連濁が生じ、子音は有聲音の[d]となる。また、「作り」の語頭も無声子音[t]であり、直前に「荷」が付いて複合語「荷造り」になると連濁が生じ、子音は有聲音の[d]となる。今回の調査においては、複合語がいくつかあるが、「仮住まい」「鮎寿司」「入れ墨」「横好き」など複合語の後部要素の子音が[s]である場合は、複合語として発音された場合に[z]の音が現れ、[d]の音が現れることはなかった。無声子音を語頭に持つ単純語を、複合語の後部要素とし、かつ連濁させる場合は、同じ調音点の有聲音で対応させる(有聲音に変える)というルールは、本研究においても当てはまることと考えられる。

次に(4)については、「図」の語頭の子音は[z]だが、直前に「地」が付いて複合語「地図」となった場合も、子音は[z]のままである。また、「髄」の語頭も子音は[z]であり、直前に「骨(こつ)」が付いて複合語「骨髄」となった場合も子音は[z]のままであるのが自然である。こうした、複合語の後部要素となったときの発音の一貫性ということも、四つ仮名の区別の保たれやすさに関与している可能性が考えられる。

このように、背景にあるメカニズムは同じであると考えられるものの、四つ仮名の場合は、ガ行音の場合とは逆に、連濁がある場合に「古い」音である[dz]が発生する。そして、日比谷(2002)では、語種が和語である場合に、ガ行音が鼻濁音化しやすい(古い音が出やすい)ことが分かったが、四つ仮名においても、和語である場合に、[dz]音(古い音)が出やすいことが分かった。

しかしながら、本調査において実際に発音が確認できた音は、[t]に対応する有聲音である[d]ではなく、[dz]であった。その理由については、1節において述べた歴史的な変化が関連していると考えられる。四つ仮名の歴史的な変化において、破裂音[d]が摩擦成分を伴う破擦音[dz]に移行するのは自然である。先行研究によれば[t]に対応する有聲音が[d]であった時代は確かにあったと考えられるため、四つ仮名の区別が曖昧になる中で、[d]が[dz]に自然に移行したと考えられる。これは、高知方言においても同様であると考えられる。

6. おわりに

本論文では、高知県出身の話者に「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」の四つ仮名を含む単語を発音していただき、その音が、摩擦音であるのか、破擦音であるのか調査・分析を行った結果及び考察をまとめた。結果としては、「ジ」「ヂ」を含む語を発音していただいたところ、協力者3名がすべての「ジ」「ヂ」音について摩擦音[ʒi]での発音をした。

「ズ」「ヅ」については、若年層の協力者2人は、摩擦音[zu]での発音をした。そして、老年層の協力者1人は、ほとんどの調査語について摩擦音[zu]での発音をしたが、一部の単語については、破擦音[dzu]で発音した。

本論文では、老年層 1 人、若年層 2 人に對し調査を行ったが、母数として少ないことから、今後、より多くの老年層、中年層、若年層の話者に調査を行う必要がある。また、今回は単語を発音していただく形式をとったが話者同士の対話形式のほうがより、正確な調査結果を引き出せるのではないかと考えられたため、調査方法についても、再度検討し、調査を行う必要がある。また、前節にて触れた(3)について、今回の調査では当てはまらない語に「餌付け」と「大詰め」の二つがあり疑問が残る。この理由についても今後明らかにする必要があると考える。

参考文献

- 上野智子(2020)「位置と方言区画」「方言の特色(1)」「方言の特色(2)」『高知県のことば』明治書院, pp2-3, 8-9.
- 大野晋(1977)「7 仮名遣いの歴史」大野晋・柴田武(編)『岩波講座 日本語 8 文字』, 岩波書店 pp.301-339.
- 奥村三雄(1977)「6 音韻の変遷(2)」大野晋・柴田武(編)『岩波講座 日本語 5 音韻』, 岩波書店, pp.223-252.
- 尾崎喜光(2015)「全国多数調査からみるガ行鼻音の現状と動態」『ノートルダム清心女子大学紀要』第 50 号, pp151-168.
- 久野眞(2005)「日本語音声のバリエーション—方言研究の視点—」『日本音響学会誌』61-9.
- 小松英雄(1981)「第四章 清濁のしきみ」『日本語の世界 7 日本語の音韻』中央公論社, pp.127-128.
- 土居重俊・浜田数義(1985)「音韻」『高知県方言辞典』.
- 外山映次(1972)「第三章 近代の音韻」, 中田祝夫(編)『講座国語史 第 2 卷 音韻史・文学史』, 大修館書店, pp.175-268.
- 中東靖恵(1999)「若年層話者のガ行鼻音に対する意識—近畿以西、関東、東北・北海道地域出身者の比較—」『岡山大学文学部紀要』32 号, pp.91-105
- 中東靖恵(2000)「若年層ガ行非鼻音話者のガ行鼻音に対する意識」『岡山大学言語学論叢』7 卷, pp.1-30
- 日比谷潤子(2002)「言語変異の地理的差異」『音声研究』第 6 卷, 第 3 号, pp60-68.
- 森田武(1977)「7 音韻の変遷(3)」, 大野晋・柴田武(編)『岩波講座 日本語 5 音韻』岩波書店 pp.255-280.
- 吉田則夫(1982)「高知県の方言」飯豊毅一, 日野資純, 佐藤亮一編『講座方言学 9 九州地方の方言』国書刊行会 pp425-449.